

5・6 世紀における渡来民社会の形成とその後

福岡澄男

(元大阪府文化財センター理事)

1. 古代渡来民(人)に関する考古学的研究が本格化したのは 1960 年代以降である。渡来文物は縄文時代にも認められ、弥生時代以降になると増大する。韓国の無文土器が九州を中心に出土し、ある程度まとまって確認できる集落遺跡も指適される。古墳時代には博多湾に面する西新遺跡に朝鮮半島由来の土器が多く出土し、交易に従事する人々が居住していたことが想定される。この時代の渡来文物は近畿地方でも出土しており、大阪市加美遺跡では韓国で製作された陶質の土器が出土している。
2. 5 世紀初頭前後に朝鮮半島からの文物渡来の大きな波が波及する。この時期には窯業や馬の生産等の、後世に継続する重要な

技術が含まれており、手工業技術者や知識人の渡来があったことが知られる。韓式系土器の出土数、分布のあり方から近畿地方が渡来民を受け入れた中心であったことも明らかとなっている。これは当時、日本の政治勢力の中心が近畿地方にあり、中国や朝鮮半島諸国との外交交渉を主として行っていたことと無関係ではない。

3. さまざまな文物とは別次元で、人間の渡来と定着を検討するには土器をはじめとする日常生活用品を対象とするのが有効である。考古学の研究者が韓式系土器と呼称する、韓国の同時代遺跡から出土する日常土器と酷似する土器群は、近畿地方を中心に 5 世紀初頭頃から普及し、5 世紀終末頃製作技法は日本化するが形態は平安時代まで継続する。そして韓式系土器と前後して伝わった竈は近現代まで形を変化させつつ日本の生活文化に深く浸透した。
4. 従来、U 字形土製品と呼称されてきた考